

「無知」と「排他的な知識」が生み出すもの

—世界的課題へのまなざしから—

Maciejewska Beata (マチェイエフスカ・ベアタ)

琉球大学人文社会科学研究所博士課程 2 年 (ポーランド)

1. 問題意識

現在、格差社会をはじめ、飢饉、環境破壊、紛争、生活習慣病の増加といった焦眉の問題が数多く浮上している。そこで、このような多様かつ複雑な諸問題について、はたして根本的な原因は何なのか、それは存在するのかという疑問が生じる。一見、これらの問題には、共通点がないようにも見える。例えば、移民問題及び環境破壊・温暖化の間には、どのような関係性があるのか、一言で指摘することはたやすくはない。しかし、全ての問題には一つの共通点があるのである。その共通点とは問題に直面する人間の態度である。本稿では、この態度について考察し、留意すべき重要な二つの点、つまり個人的な無知及び排他的な知識について論じたい。これらのポイントの重要性を自覚することが諸問題の解決の出発点なのである。

次節から、その根拠を示そう。

2. 論拠1: 無知

今日では、絶え間なく勃発する戦争、蔓延する政治家の汚職、病気、気候変動、所得の不平等、そして、不安定な景気回復などのニュースが連日マスコミに大きく取り上げられている。このような否定的な情報が洪水のように溢れた結果、個人的生活においては無気力感の蔓延が深刻化している。最近、全世界で注目されているアメリカにおける大統領選挙がその一例である。大統領候補である 2 名が奮闘する姿を見た有権者は「真の改革はやはり無理なのだ」と思い、自分は組織の一員にすぎないため、強力な政治家に国の行く末を委ねてしまおうという間違った姿勢をとるのである。

世界情勢の向上にはまだ発展の余地が残されている。しかし、経済学者である Roser (2016) が指摘するように、過去と比べると、多くの分野において、格段の進歩が進んできた。同様に、ハーバード大学の Pinker 教授は、長時間にわたって暴力が衰退してきたと述べており、さらに、現在、我々は人類史上最も平和な時代に生活しているのであるとしている。これらの先行研究から、現代における人間は単なる無力な傍観者ではないということが言えよう。

一方で「10 秒ごとに、子供が飢餓関連疾患で死亡する」(The Hunger Project, 2016)という指摘もある。5 歳の息子の母である筆者にとって、このような情報は信じられないほど恐ろしいものである。しかし、この問題を解決するために、はたして自分に何ができるのだろうかという考えが脳裏をよぎる。そして、どうしようもない絶望感にさいなまれつつ、ふと、傍らのごみ箱の中身を一瞥する。中には、ハム一切れ、期限切れのパン、そして、一本の黒ずんだバナナがある。これらは、単なる家庭の生ごみにすぎない。しかし、FAO(2016)によると、毎年、世界で人間の消費のために製造された食品のおよそ三分の一にあたる約 13 億トンが無駄になっているという。筆者もまた、無意識のうちにこのような恥ずべき統計を助長していたのである。実際、毎日、各人が意識的に食品の無駄を削減したとしても、世界的なレベルにおける飢餓の問題に革命をもたらす可能性は低いかもしれない。それでも、家族や地域社会における考え方を徐々に変化させることによって、問題の解決をめぐる議論に少しずつ実質的に貢献できる可能性はある。とはいえ、問題認識・意識の向上なしでは個人的な貢献は不可能なのである。

さらに、無知は時として、人に非常に皮肉的な態度を取らせる傾向がある。例えば、ベルギー国王のレオポルド 2 世(1835~1909)による 23 年間の統治下(1885~1908)では、1000 万人以上、つまり当時のコンゴの人口の半分は死亡したと推定されている(Johnson, 2014: 68)。そして、その一方、国王の貪欲は世界社会から容赦ない批判を浴びた。他方では、個人的なレベルにおいて、現代社会は依然としてこのような振る舞いを模倣する。背景を考えずに、象牙の代わりに、高級のハイテク機器を購入する。もっと具体的に言えば、現代のコンゴ民主共和国においては子供の人権侵害を含む現代における奴隷は今も未解決の問題として残っている。

Gibson(2014)によると、アップル社が発売する最新のガジェットに対する我々のニーズこそが残虐行為を永続させる最も明白な例であるという。世界のコルタン供給の 80%は前述の地方から来ているためである。これは、つまり、アップル社を始めとする多国籍企業のすべてがその原材料獲得のために、コンゴ民主共和国における採掘坑の事業に依存している。消費者は自分の消費の結果について熟考せず、消費を続けている。このことは、無意識に現代の奴隷を生み出すという倫理的な問題を内包している。さらに言えば、消費者は、脆弱な国・周縁国の弱みに付け込むことによって、その地域の住民から間接的に搾取しているのである。個人的利益を追求する多くの人は幸せな無知を選択し、意図的に消極的な態度を取り、他人の人権侵害に目をつぶっている。そして、他人の人生の悲劇について知らないふりをしつ生活しているのである。消費が幸せに匹敵するとされる現代の消費社会では、「我思う、ゆえに我あり」というデカルトの名言はもはや意味を持たず、「我買う、ゆえに我あり」がまかり通るのである。

3. 論拠 2: 排他的な知識の概念

排他的な知識(exclusive knowledge)とは、あるグループ、たいてい我々が所属しているグループにおいて、世界がどのように機能するかについて、ユニークで優れた知識を持っているという考え方のことである。

Inayatullah (2014: 457) は排他的な知識という概念に言及する際、その三つの特徴を指摘する。第一に、自分のグループだけが自然や社会生活の営みについての知識への特別なアクセス権を持っていると考えること。第二に、そのような知識には何らかの優れた点があると思うこと。最後に、他人の知識の主張には自分たちの主張に比べ、不十分または欠点があると考え、である。確かに、このような排他的な知識を土台とした「正義のモデル」へ変換をすることは、強制的な行為であり、民主主義の理想からは程遠い。この態度を明瞭にする例は数え切れないほど存在するが、この問題の本質を反映する一つの例のみを紹介しよう。2015年に移民入国数が百万人を超えたことに伴い(IOM, 2016), 2016年現在、ヨーロッパは大量の不法移民に直面しており、移民問題のための劇的な解決策を模索している。ドイツ首相であるアンゲラ・メルケルは、自分の排他的な知識に基づき、主に経済的なインセンティブを活用することによって、移民をヨーロッパへ誘導した。ヨーロッパの移民政策の枢軸は移民を経済的に支援しつつ、ヨーロッパにおける生活の新たな可能性を創造することだという。しかし、その結果、テロ事件、強姦事件といった犯罪の発生頻度は飛躍的に増加しているという指摘もある。ヨーロッパ人とイスラム圏からの移民の間には不信感や嫌悪感を抱き合うことが避けられないまま、ヨーロッパは悪循環に陥ってしまっているのである。

イスラム教徒はヨーロッパの社会へ融合すべきであるという信条は排他的な知識に由来している。このような前提は誤った期待ではないであろうか。独自の歴史、習慣や法律を創造してきたイスラム教徒の視点からみれば、排他的な知識を持つグループはヨーロッパ人であるとは言えないとされるだろう。

移民問題には他の解決策は存在するのであろうか。『世界の貧困及びガムボール』という短編映画がある。この映画の中では、Beck は、ガムボールを利用することによって、移民政策の現状を鮮明に描写し、苛酷な真実を明らかにする。そして、アメリカの移民政策の不条理を指摘する以外に、Beck はもう一つの重要な側面を強調する。移民政策は窮地に直面する地域の立場からみれば、有望な人材を奪う形態であり、決して貧困を解消するための効果的な方法ではないと指摘する識者もいる。その代わりに、現場で援助することを提案している。西洋文明の優位性を強調せずに、移民の文化的な相違を尊重し、現場で人々を援助するという代替案は再検討に値するのではないだろうか。

4. 小結

以上の論拠が示すように、人間は自分の責任を回避すること、または排他的な知識の所有者であることを当然であるとする傾向がある。それ故に、諸問題の解決を探っている我々にとっては、最大の課題はそのような態度を変えるということである。その際には、問題を意識的に自覚することが鍵となる。さらに、自分の責任を認めるという一つの決定は世界的諸問題の解決法の発見に偉大な一步を刻む。非常に小さく、気付きにくい変化にも関わらず、世界を根底から変えるという影響力がある。

『誰もが世界を変えたいと思うが、誰も自分自身を変えようとは思わない』

ロシアの小説家・思想家であるレフ・トルストイのこの名言を念頭に置くべきだ。このような意識の変化を境に人間は「世界をより良い場所にするために、私は個人的に何をするのか」あるいは「私はこれらの問題を解決するためにどのように貢献できるのか」という自問自答を始める。ここには、世界に変化をもたらす、問題解決の現実的な見込みがある。世界についての知識を獲得すればするほど、より意識的に決定することができるのである。さらに、子供に教育の機会を与える必要性については言うまでもない。日本在住の筆者の息子はいわゆるインターナショナル幼稚園に通っている。彼は、そこで「他者性」によって他人を軽蔑せずに、全ての人間を平等に扱うことが当然であることを日々学んでいる。ここには一筋の希望の光がさしている。

<参考文献>

Beck, Roy. 2010. Immigration, World Poverty and Gumballs. <https://www.youtube.com/watch?v=7OwV-zfbHoY>

FAO. 2016. SAVE FOOD: Global Initiative on Food Loss and Waste Reduction. <http://www.fao.org/save-food/resources/keyfindings/en/>

Gibson, C. Robert. How the iPhone Helps Perpetuate Modern-Day Slavery. The Huffington Post. 2014.11.09. http://www.huffingtonpost.com/carl-gibson/how-the-iphone_b_5800262.html

Inayatullah, Naeemin. 2014. "Why do some people think they know what is good for others?", in: Jenny Edkins, Maja Zehfuss. Global politics : a new introduction. London ; New York : Routledge, p.450-471.

IOM. 2016. Compilation report of available data – 2015 Overview.

<http://doe.iom.int/docs/Flows%20Compilation%202015%20Overview.pdf>

Johnson, Steven P. 2014. King Leopold II's Exploitation of the Congo from 1885 to 1908 and its consequences.

http://etd.fcla.edu/CF/CFH0004661/Johnson_Steven_P_201408_BA.pdf

Pinker, Steven. A History of Violence: Edge Master Class 2011. 27.9.2011.

<https://www.edge.org/conversation/mc2011-history-violence-pinker>

Roser, Max. 2016. Our World In Data. <https://ourworldindata.org/>

The Hunger Project. 2016. KNOW YOUR WORLD: FACTS ABOUT HUNGER AND POVERTY.

<http://www.thp.org/knowledge-center/know-your-world-facts-about-hunger-poverty/>